

らくがき文化史

国宝からトイレまで

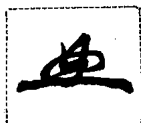
文学博士 李家正文



million books



らくがき文化史
国宝からトイレまで



昭和37年 7月30日 第1刷発行

著者 李^りの家^{いえ} 正^{まさ}文^{ふみ}
発行者 野間 省一
印刷所 豊国印刷株式会社
(藤沢製本)
発行所 株式会社 講談社

¥ 230

東京都文京区音羽町3の19
振替東京 3930
電話大塚(941) 大代表3111

© 李家正文 一九六二

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

らくがき文化史

国宝からトイレまで

文学博士 李家正文



million books

立派な文化史

国立東京博物館学芸部長 野間清六

廁カサバ（便所）の研究で博士号をとった李家さんは、落書の研究でもそれに劣らぬ長い研究歴と深い造詣とを持っている。著者がこうした特殊な対象と取り組んで来たのは、そこに人間の偽らぬ姿を見ようとしたからである。はなやかな広い表通よりも狭い裏町に、より社会の真実が眺められるようなものである。

この本の中で扱われている落書は、古今東西にわたっていて、エジプトやギリシャの古代のものから、現代の身近に見るものにまで及んでいる。対象は卑俗なものだが、それらが世界的な視野の中で語られているところに立派な文化史の役割も果し、また鋭い文明批評にもなっている。

読む人は思いがけぬ意外な資料に微笑を禁じ得ないことだろうがまたそこに流れている著者の人間追求の情熱にひかれ、人間の姿を改めて見直すことであろう。

ン・ブックス

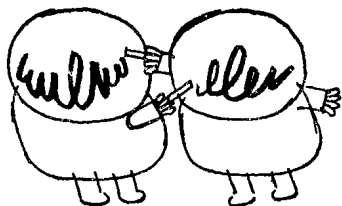


講談社 ¥230.

らくがき文化史

—国宝からトイレまで—

李家 正文



ミリオン・ツクズ

装 幀……………宮本一歩
本文カット……………著 者

目次

- 一、らくがき開眼……………一二
- 二、らくがきと大学生……………一五
- 三、小説作品の題材……………二四
- 四、性の発見……………三三
- 五、相合い傘……………六六
- 六、美人藤さま……………七四
- 七、黄金の芸術……………八四
- 八、仏像の台座……………九六

九、遊覽の記念……………	七〇
十、らくがきの藁……………	八〇
十一、へのへのもへの……………	八四
十二、人物日本史……………	八九
(一)、原始時代の人物……………	九〇
(二)、古墳時代の人物……………	九三
(三)、飛鳥時代の人物……………	九六
(四)、奈良時代の人物……………	一〇三
(五)、平安時代の人物……………	一〇九

(六)、鎌倉時代の人物	二五
三三、壁の詩	二八
三四、漢字の伝来	三〇
三五、火事の落首史	三三
三六、らくがき天国	三三
三七、遊戯の形態	三六
三八、図書の嘆き	三九
三九、日本の風景	三八
四〇、古代の舟	三九

二二一、	らくがきの植物	一九
二二二、	らくがきの動物	二〇一
二二三、	魚のらくがき	二二三
二二四、	カメラの眼	二二五
二二五、	金山の坑道	二二九
二二六、	歴史の誕生	二三三
二二七、	らくがき運動	二三八
二二八、	らくがき博士	二三三
あとがき		二三五

らくがき文化史

一、らくがき開眼

ふくらんだ白いクッション、緑色のピロッドに包まれたベッド。そこに、豊満な裸体の女が、いまひとり静かに横たわっている。かの女の頬は、たしかに紅潮していて、その眼は、なにかを鋭く求めている。固く結んだ唇はコケットである。

縮れた髪は、ブロンドの焰である。かの女は、両手をあげてそれをかかえている。丘のように丸くふくれあがった二つの乳房。なだらかな肉体の曲線を描いて、まるで女王蜂のように細いウエスト。大きくてたくましいヒップのあで姿を、惜しげもなくさらしてはいるが、その両足は、いくら

か伸びかねて、楽なポーズをとっているかのように見える。

これは、名画である。マドリッドのプラド美術館に蔵せられていたフランシスコ・ゴヤの作品、裸体のマヤ夫人の図である。

ゴヤの肖像



画家のゴヤは、一七四六年スペインのフェンデトドスのある貧しい家に生まれた。かれは、バイエウに画を学んで、ついにシャルル四世の宮廷画家となった。そして、アルベ公爵



裸体のマヤ

夫人をモデルとして、着衣のマヤと、裸体のマヤとを描いたのであるが、そのはじめは、らくがきに豚の絵ばかり描いていたが、それが認められたからであると伝えられている。

モナ・リザや、最後の晩餐の名画で知られるレオナルド・ダ・ビンチは、ルネッサンスの偉人であった。かれの描いた作品のなかに、ミラノのアムプロジアーナ図書館に残る憂愁のルドビコの肖像画がある。

その肖像画のモデルであるルドビコは、一四九八年フランス軍がミラノを攻めたとき捕えられて、ついにトゥーレエヌ州のロオシュの町で死んだ。かれは、封建時代の暗い地下牢で、幾年かを過ごさねばならなかったが、後に、城の塔のなかの一室で日の目をみることを許された。ルドビコは、捕われの身を嘆きながら、壁にらくがきをした。

わたしは不幸だ。

その文字は、大きく書かれている。また、大きな兜や、鎧や人の顔が、かつてミラノにいたころ、レオ

ナルドとともに試作したフランチェスコ・スフォルツアの武装した像のおもかげを語るかのような習作のらくがきがみられる。その室は、いまでも見物することができるが、絵の具の重くるしい、いくつかの遺作が、人のところを打つのである。

らくがきから生まれた人間の幸福と、そしてまた、らくがきに終わる人間の不幸と、そこには、きびしい人の世の運命さだめのきずながはられていて、人間であることの幸福と不幸との映像が、まざまざとうつし出されている。

らくがきは、こうして開眼かいげんする。らくがきは、どうやら人間のこの二つの姿を描いたものといえないものであるうか。

二、らくがきと大学生

ことばというものは、必要によって生まれるものである。ある事物なり、ある行為をなんといふことばであらわすかは、その事物なり行為があったとき、はじめて作られるものだから、もし、それが無いなら必要はないことになる。

らくがき、らくがきするという日本語が、英語で、なんと呼ばれるかというところ、scribbling、scrawling、scribble、scrabble、scrawl、が、ふつうに和英辞書で知られる。これらは、筆蹟もしくは、文章に頓着しないで、無造作にもしくは急いで書くという意味のことばであろう。壁にらくがきがしてある。There are pencil scribbles on the wall. らくがき貼り札ことわお断りは、No scribbling. Scribbling forbidden. ということになる。どうも日本のらくがきを意味することばの内包する広範囲な題材用材から考えると、壁でないときはどうなるか。鉛筆でないもので刻んだときはどうなるかということになるが、英語には、総括的なよい名詞が見当たらないようである。そのときに応じて、scribbling on the wall. また wall writing か、write on the wall, などと、それぞれ説明的に長ながしくいうよりほかはないらしい。

学問の府、大学の誕生とともに、大学生たちのらくがきは発生した。

十三世紀ごろ、中国からヨーロッパに紙というものが伝わって、百年もたたないうちに、パピルスや羊皮紙が姿を消すようになった。大学のある町、パリのセーヌ河の左岸、ラテン区に集まった